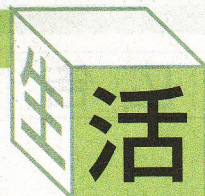


◎東京新聞

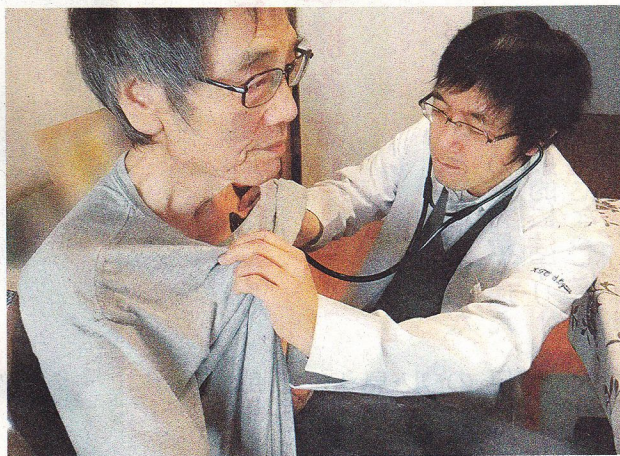


がん診療

がんの診療では、病院で治療を受けることが一般的です。特に病状が進行した場合は、入院医療が選択されます。では、がんの診療における在宅医療とは、どんな場合に受けるものなのでしょうか。

当院は「在宅療養支援診療所」として在宅でのがん患者も診療しています。多くは通院が困難となり、自宅での診療を希望する方です。手術や抗がん剤など積極的な治療は選択せず、人生最期の時間を家族と過ごすための診療を行います。

最期の時間を家族と



スタッフが患者を診察する

診療としては疼痛をコントロールするなど、緩和ケアが主になります。精神状態が不安定になり、心のケアが必要な場合もあります。腸閉塞などで口からものが食べられない場合は、点滴などを行います。

当院では、自宅療養が困難な状況にも対応するため、病院と連携を取

っています。入院医療を併用することで症状が軽減したり、末期がんと診断された方が治癒した例もあり、治療をあきらめてはいけなないと思います。

これまでの六十歳以上の在宅がん患者百例を検討すると、年齢の中央値は七八・五歳で、男性が多い傾向でした。胃がんなど消化器のがんが六割を占め、肺がん二割、以下、腎臓・泌尿器、乳腺のがんが続きました。

在宅医療を始めてからの生存期間は中央値で二十九日でした。すなわち、亡くなるまでの診療期間は一月余ということになりました。興味深いことに、この期間は高齢者ほど長くなるのが分かりました。九十歳代の患者なら八十日ほどです。高齢者のがんの進行が遅いことを臨床的に裏付けています。

(川崎高津診療所院長)
 次回は二月十九日掲載